

右の写真は、何年か前に掲載したかもしれません。思いつきで、レンゲソウの田んぼに説明の看板を立てようかと思って、きょうの記事はその下書きです。(恐縮)



## 冬の陽と大気で米を作る

連休が終わって今年も田起こしを始めました。レンゲソウの花が盛りでもったいないような気もしますが、土の中に混ぜ込んでしまいます。「<sup>す</sup>鍬き込み」と言います。米づくりの肥料にするためです。

で、いきなり話を換えちゃうけど、大気(空気)の組成を分析すると、生き物が利用している酸素は全体の1/5に過ぎず、残りの4/5を占めるのがチツです。

じつはチツというのは、植物にとって最も大切な肥料分です。しかし空気中に存在する気体のままでは、作物が吸収することはできません。

さて、レンゲソウに話を戻します。レンゲの根を掘って、泥を洗い流して撮影したのが、冒頭の写真、そして右の2枚も同じです。

たくさん小さなコブがついています。これが「根粒」で、豆科植物との共生で知られる土中微生物のコロニー(棲息群)です。根瘤バクテリアとか根粒菌と呼ばれます。

根粒菌は、レンゲの根にとりついて栄養分をもらいながら、そのお返しに、空気中のチツ分を作物が利用できる形に変えてレンゲに供給しています。これが「共生」です。

化学肥料(多くは輸入品)を購入して散布するのが「近代農法」です



が、昔はどこでもレンゲソウが肥料として育てられていました。レンゲは、秋から冬を越して春にかけて生育する貴重な植物でもあります。

このように昔に学びつつも、大型のトラクターなどが普及して、耕う

んやスキ込みが簡単にできるようになった現代こそ、より自然を活用できる条件が広がっているのだとも思っています。

あらら、もう紙面がない。まとまらないなあ……



今年もレンゲ田に、ひたちなか市の保育園の子どもたちが遊びに来てくれました。でも、花よりバツ？